



増殖した。今ではすべて自主的に運営され消毒器具の貸付けや技術指導の外は全く手がいらぬ、事業成果も九つの問題を除きほとんど完遂され、十二指腸虫の検査も昨年度二十三、二%もあったものが本年は六・四%に減っている。指定三地区の出

## 住民と社協の輪 ■ 森 浄子

生、乳幼児の死亡率も県の平均を下廻っている。特に町の保健婦さんとは親子姉妹の様に親しい交歓を見せている。  
児童遊園地も資材代は社協が助成、他は区民の勤労奉仕。そこに季節托児所が開かれ幼児が嬉々として遊びたわむれてい

る。  
社会福祉事業への関心も深まり共同募金その他の各種募金も進んで拠出されている。三カ所とも一応目的は達したかの感はあるが、後一年指定期間を延長して完全育成を図りたい。  
当町モデル地区の構成は誠に

小さい、然し次から次へ、又この経験を生かして順次大きな地区へと進めて行き、如何に楽園への道が遠くともやがては町内の全地図を、保健と福祉の文字で塗りつぶしたいものである。  
(民生委員・大津町)

いろいろの問題も自分自身にひきうつして考えたとき、誰もが共感し放って置けなくなるものである。「みんなが幸せになり、われわれの町を明るく住みやすくするための社協」この素晴らしいことばのひびきにひかれて、明日からでも、自分達の住む町がお互いの力で、悩みも苦しみもそして願いが解決されて行くような気がして、私達の町の社協も十年前に結成されたのである。

然し、いざ仕事に取りかかって見れば、あれもこれも頭打ちするような事が多く、悩みの解決どころか、社協そのものが悩

み果てなしと云う有様である。  
社協の仕事が人間を対象とした仕事であって、物を取扱う仕事でない以上、人と人の関係からかもし出される問題の解決には、相当の熱意と努力の積み重ねが必要なのは、十分誰もが覚悟はしていた。  
地域に起る諸問題の解決のためには、その問題の実態が十分に調査され理解されていなければならぬのである。病人の診断が人命を左右すると同じように、診断を間違った社協活動は住民の協力はおろか信頼をも失う結果になる事である。  
先づ地域活動に従事するもの

は、協議会の力でどの程度の仕事が出来ると云うことを考え合わせて、とり上げる問題を決めて行かなければならないという事は、何回か壁にぶち当たったものの痛切に考えるところである。又地域社協に従事するものは、常に明るい町づくりの建設のために、ひたむきな精進と心構えを持って問題解決に取り組んでいるつもりでも、周辺の町村とちがいの市の中央に位する町では、高い壁に取囲まれた城のあるじは他人事には暇がない、とばかりに何を呼びかけてもそっぽを向く、こうなる町ぐるみの社協などと云うことはお題

目にも等しいもので恥かしい限りである。  
他人の事を話すより先ず吾が家の塵箱のゴミの集取や、溝の浚渫、そして税金でも安くする運動でもした方がよい、と云う現実派もようよしている。  
こうした中での社協活動だから仕事には骨が折れる。と同時に出発当座の社協理論を普及宣伝する方法に、知恵がなさ過ぎた事にも十分反省しなければならぬと思っている。  
それにつけても地域社協の財源が、町ぐるみの住民参加による会費制度であれば、社協としても会費を徴収している手前、

どうしても何か目につく仕事を取り上げがちになって、結局行事的なものに終って仕舞う。

然しそうした安易な気持で運営されるとすれば、何時の日にか住民からも、社協活動がどれだけ町を住みよくしたか、町民にどれ程の幸せをもたらしたか、と問われた場合社協は答えるすべもないだろう。

こうした社協は必ず消滅せざるを得ないだろう、あれを思いこれと思うと何処かに何かがかかっている、今十年を迎えた地域社協が、今こそ体質改善をじっ

くりと考え、社協が住民の側にたった立場から積極的に改善して行く時期が来たと思う。社協側ではこうもしているのに、ああもしているのに、と思ってもそれが住民に伝わらず、社協部門のみの活動であってはならない事も十分反省をしている、要はお互い一人一人が、あなたも、私も、と皆自分の隣近所の人達の幸せを考えて行くと云う精神が、協議会活動を通じて培われると云うところに究極の目的があり夢があるのではないだろうか。

アメリカでは社会的に信用を得て相当な人物になるには、必ず社会事業に何か関係を持っていないと行かないとか、そしてそれが世間の信用を得る道であると考えられているので、如何に財力や社会的な地位を持っている者でも社会事業に関係を持たぬ人は尊敬されない、と云う話を聞き、自分達はたとえ小さな地域の仕事にも感謝の念とほこりを持って行かなければならないと思っている。  
そして反省は一步の前進と考え、民と社協がお互いに手を握

り合っつて一つの輪にとけ込む日を実現させる為に、一層の研修と努力を続けなくてはならないと思う。

熊本にも既に福祉会館も老人センターも出来た、この辺で社会事業短期大学の設置も早くはないだろう、若い人達が福祉国家を目ざして足下の地域の町づくりをして貰える日こそ、私達も土台石となった喜びにひたすることも出来よう。  
(民生委員・熊本市)

## 新しい社会福祉の担い手 ■ 杉 村 春 三

普通の場合社会福祉のビジョンなどといえど大抵どんな福祉施設が整備されるかというような話になるのが常である。

けれどもよく考えてみると、また詳しく熊本県の社会福祉活動の現状分析してみると、「社会福祉ビジョン談義」もそう簡単にはいかないと判断せざるを得ないような気がする。

社会福祉活動と社会保障制度が今日位相互に接近して来た時点は歴史的にみてないのは周知の通りであるのに依然として「社会福祉」に関する限り、かなり前時代的な考え方も事実上存在するし、それがあるがために発展前進すべき社会福祉活動が陋固とした牙城にたてこもって、真に社会福祉活動の前進を

まちのそんでいる地域社会住民との間につめたい超越と離反があるようにも感ぜられる。社会福祉のビジョンはこのような社会福祉の前進停止の現状診断から出たものでなければ所謂夢物語にすぎないであろう。何が熊本県の社会福祉活動前進の隘路になっているのか、この課題についての積極的な解明を志す人

達にとっては「社会福祉のビジョン」というものはむしろ切実なねがいという形をとって出てくるものであろう。  
熊本県の社会事業文化は勿論歴史的過程をへて形成されて来ているものであるが、かつての時代にかんがりの先駆的役割を果たした数々の先輩の業績について現在の県民、とくに若い世代の

